

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00516

研究課題名（和文）日本から発信して世界を結ぶ村上春樹 「惑星思考」文学の研究

研究課題名（英文）Haruki Murakami from Japan to the World: A Study of "Planetary" literature

研究代表者

小島 基洋 (Kojima, Motohiro)

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：90438333

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000 円

研究成果の概要（和文）：世界文学の代表的な小説家である村上春樹を惑星的な作家として位置付けることが、本研究の目的である。村上が世界的に知られるようになったのは、アメリカで出版された英語版がきっかけとなったことは間違いない。しかし、現在、彼の作品は英語版を介さずに、世界の様々な言語に翻訳されている。アメリカ発のグローバルな作家ではなく、日本発の惑星的な作家としての村上春樹を本研究は描き出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、村上春樹をアメリカ発のグローバルな作家ではなく、日本発の惑星的な作家として位置付けることに成功した。これは、21世紀現在において、地方文学がいかに世界文学になるかのモデルケースの一つを提示することに成功したことを意味する。文化がいかに国境と言語を越境していくかの将来的なヴィジョンをここに見出すことが可能だろう。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to position Haruki Murakami, one of the leading novelists in world literature, as a planetary author. There is no doubt that Murakami became known worldwide through the English editions of his works published in the United States. However, his works are currently being translated into various languages around the world before the English edition was published. This study depicts Haruki Murakami as a planetary writer from Japan, rather than a global writer from the United States.

研究分野：文学

キーワード：村上春樹 世界文学

1. 研究開始当初の背景

世界文学の中心をなす村上春樹を、アメリカを拠点とする「グローバリズム」作家とみなす論者は多い(辛島、2018年)。しかしながら、『1Q84』(2009年)以降、英語訳に先んじて他言語の翻訳が出版される事態が顕著となり、英語翻訳版およびアメリカ文壇のもつ世界的影響力は急速に低下しつつあった(Ziellinska-Elliot、2015年)。

2. 研究の目的

本研究の目的は、世界的な名声を獲得した村上を「惑星思考」作家として位置づけることにあり。すなわち、村上文学を「アメリカ発のグローバリズム文学」ではなく、「日本から発信された世界を結ぶ文学」として捉え直すことを目的とする。

本研究で援用する枠組みが「惑星思考」(planetality)である。「惑星思考」とは、インド出身の哲学者ガヤトリ・C. スピヴァクが提唱した概念で、アメリカ中心主義のグローバリズムを批判し、世界各地の文化を等しく尊重する立場である。スピヴァクは「地球(globe)」を覆い尽くさんとする「グローバリズム(globalism)」への対抗概念として、「惑星(planet)」全体を結び合わせる「惑星思考(planetality)」を提唱した(スピヴァク、2004年)。それに従えば、「惑星思考」の文学とは、他文化との相互交流を伴いつつ、独自に発展を遂げた各地域文学の集合体だということになる。

3. 研究の方法

村上文学を「惑星思考」文学として捉え直すには、日本を拠点としたローカルな文学が他の文化圏に越境していくプロセスを検証する必要がある。

(1) テーマ別個人研究

本研究グループはそれぞれ専門の異なる研究者4名で構成されているため、それぞれが、以下のテーマを中心に、村上文学の「惑星」的な流動性、越境性を専門的見地から検証していくことになった。

- ◆ 多言語性 (担当: 小島) 英語圏を中心とした翻訳を検討する。
- ◆ 物語構造 (担当: 横道) 物語に着目し、その普遍性を検討する。
- ◆ 歴史意識 (担当: 高橋) 戦後史における村上の位置を検討する。
- ◆ 戦後文学 (担当: 山崎) 「戦後文学」の観点から米国との関連を検討する。

(2) 集団での知の共有

研究グループ4名のみならず、国内外の多くの村上研究者の知見を共有し、発信するために共同研究者4名が中心となって立ち上げた組織「村上春樹研究フォーラム」が設定された。そこで研究イベントが定期的開催され、毎年、学術雑誌が刊行された。

村上春樹研究セミナー・レクチャー開催

学術雑誌『Murakami Review』刊行

4. 研究成果

(1) 研究セミナー・レクチャー開催

村上春樹の研究成果は、共同研究者4名のみならず、多くの研究者をゲストとして招聘することで、広く共有されることとなった。翻訳論、テキスト論、歴史、ジャーナリズム、物語論、韓国、心理学、精神医学、伝記といった多様な視点から村上文学が捉え直された。登壇者は以下の通り(敬称略)。

セミナー

秋草俊一郎、山根由美恵、奥田浩司、小山鉄郎、内田康

レクチャー

イム・キョンソン、山愛美、斎藤環、平野芳信、伊藤弘了、ジョナサン・ディル、井上義夫

(2) 論集の刊行

本研究の成果は1冊の論集『我々の星のハルキ・ムラカミ文学 惑星的思考と日本的思考』(彩流社、2022年)にまとめられ、発信されることとなった。本書の礎には、共同研究者4名を中心に、毎年刊行されてきた学術雑誌 Murakami Review がある。以下、本論集の内容に準じて、本研究を概括する。

【翻訳】 村上が Murakami となるための翻訳の機能が明らかにされた。ジェリンスカ、ホルムは『1Q84』を中心に、各国語版の出版状況と翻訳上の諸問題を取り上げ、英語中心主義から脱しつつあることを指摘した(1章)、横道は『国境の南、太陽の西』をめぐるドイツ語版を(2章)、小島は「パン屋再襲撃」の英語版を具体的に論じた(3章)。

【歴史/物語(hi/story)】 「日本」を描く村上が「惑星」全体でムラカミとして受け入れられるためには、両極性 特殊性と普遍性 が重要であることを明らかになった。高橋は『海辺のカフカ』のローカルな「歴史」性について(4章)、内田は村上作品が世界の「物語」群と共有する神話的構造について論じた(5章)。

【海外作家】 村上が Murakami となるために必要とした日本文学からの脱却が跡付けられた。ディルは F・スコット・フィッツジェラルドが若き村上に与えた多大な影響を(6章)、星野はジャック・ロンドンの痕跡を北海道との関連において読み解いた(7章)。

【紀行】 村上自身が国内外を物理的に移動しながら「惑星」を絶えず巡っている点も重要であろう。林は村上の紀行文と小説の関係性を論じ(8章)、山崎は『ノルウェイの森』の源泉となったローマを(9章)、高橋は『海辺のカフカ』の舞台としての香川を論じた(10章)。

引用文献

辛島デイヴィッド『Haruki Murakami を読んでいるときに我々が読んでいる者たち』(みすず書房 2018年)

小島基洋ほか編『我々の星のハルキ・ムラカミ文学 惑星的思考と日本的思考』(彩流社、2022年)

スピヴァク・G. C. 『ある学問の死 惑星思考の比較文学へ』(みすず書房 2014年)

Ziellinska-Elliot, Anna. "Murakami International: The Translation of a Literary Phenomenon," *Japanese Literature and Language* (American Association of Teachers of Japanese, 2015)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 横道誠	4. 巻 1
2. 論文標題 村上春樹と筒井康隆ー世界的作家の宿命を超えた関係	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 村上春樹における運命	6. 最初と最後の頁 164-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横道誠	4. 巻 3
2. 論文標題 村上春樹の渡独体験ー「三つのドイツ幻想」と「日常的ドイツの冒険」を中心とした考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 MURAKAMI REVIEW	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋龍夫	4. 巻 3
2. 論文標題 「海辺のカフカ」論 方法としての歴史性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 MURAKAMI REVIEW	6. 最初と最後の頁 41-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Makoto Yokomichi
2. 発表標題 Über die vier Editionen von Gefährliche Geliebte / Südlich der Grenze, westlich der Sonne (Haruki Murakami)
3. 学会等名 XIV. Kongress der Internationalen Vereinigung für Germanistik (IVG). (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横道誠
2. 発表標題 村上春樹と自閉スペクトラム症グレーゾーン
3. 学会等名 2021年度京大文学教室オンラインセミナー（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋龍夫
2. 発表標題 「海辺のカフカ」における小説からの＜逸脱＞
3. 学会等名 第10回村上春樹国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横道 誠
2. 発表標題 世界文学の宿命を超えてー村上春樹、大江健三郎、筒井康隆の影響関係を考察する試み
3. 学会等名 第9回村上春樹国際シンポジウム、新北・淡江大学（Microsoft Teamsによるオンライン発表）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋龍夫
2. 発表標題 村上春樹文学における「移動」（Movement）ームーブメントとしての＜離脱＞と＜帰還＞
3. 学会等名 第8回村上春樹国際シンポジウム（北海道大学札幌キャンパス）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋龍夫
2. 発表標題 「ハンティング・ナイフ」論ー潜在するムーブメント / 移動する舞台ー
3. 学会等名 第8回村上春樹国際シンポジウム（北海道大学札幌キャンパス）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小島 基洋、山崎 真紀子、高橋 龍夫、横道 誠	4. 発行年 2022年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 344
3. 書名 我々の星のハルキ・ムラカミ文学	

1. 著者名 横道誠	4. 発行年 2023年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 -
3. 書名 村上春樹研究 サンプルング、翻訳、アダプテーション、批評、研究の世界文学	

1. 著者名 山崎真紀子（共著：高綱博文、木田隆文、堀井弘一郎）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 244
3. 書名 「村上春樹が描く上海 『トニー滝谷』における父子の傷」（『上海の戦後 人びとの模索・越境・記憶』）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

村上春樹研究フォーラム
<https://sites.google.com/view/mhstudiesresearchforum/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山崎 真紀子 (yamasaki makiko) (00364208)	日本大学・スポーツ科学部・教授 (32665)	
研究分担者	高橋 龍夫 (takahashi tatsuo) (10284340)	専修大学・文学部・教授 (32634)	
研究分担者	横道 誠 (yokomichi makoto) (60516144)	京都府立大学・文学部・准教授 (24302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------